ごあいさつ

人と海鳥と猫が共生する
天売島連絡協議会
代表 **髙橋　徹**
（北海道獣医師会 会長）

猫の健康飼育ハンドブック発行にあたって

天売島は世界的に貴重な海鳥繁殖地であります。近年、島でノラ猫が増えて一部のノラ猫が海鳥繁殖地で海鳥のひなや卵を捕食したり、驚かせて海鳥の繁殖が失敗する事例もあり、飼い猫にマイクロチップを入れて23匹を飼い猫として島民の方々に登録して頂きノラ猫保護活動が始まりました。

ノラ猫を捕獲し、島外に出して動物病院での健康チェック・ワクチン接種・寄生虫の駆除・不妊去勢手術・マイクロチップの装着を完了した後、猫の保護団体で馴化して頂き（人と一緒に幸せに暮らせるように慣らす）その後に譲渡会で新しい飼い主さんに譲渡する時間のかかる手順です。平成30年2月までに保護した数143匹、島から出した数130匹、譲渡した数110匹です。

この活動をして分かったことは、長い間ノラ猫をしていると腸内の寄生虫病や、皮膚につく寄生虫も多く、これらは家の中で生活していれば、飼い主が発見してあげられることが多くなります。

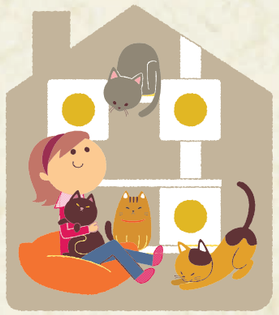
この猫の健康飼育ハンドブックは、猫の特性や病気の症状別の特徴を項目ごとに記載してあります。皆さんが猫の事をより理解して頂き、猫との暮らしを楽しんで頂きたいと思います。

「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取り組み

約100万羽の海鳥の繁殖地で「海鳥の楽園」として知られる天売島（苫前郡羽幌町）ではノラ猫が増加したことによる海鳥の減少や住民生活への影響が問題となっていました。

そこで行政や獣医師会、動物愛護団体が連携し、「天売猫方式（ノラ猫を保護し、人に慣れさせ譲渡する方法）」で生態系保全と動物愛護を両立させる取組を行っており、最近では島内のノラ猫は減少し、海鳥の繁殖にも改善の兆しが見られています。

引き続き天売猫の取組を進めるとともに、天売猫をきっかけに構築された体制を活用しながら、道内の動物愛護の促進に取り組んでいます。



猫の健康飼育ハンドブック
「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会
[構成団体]
- 羽幌町役場 町民課
- 北海道 環境生活部環境局 生物多様性保全課
- 北海道留萌振興局 保健環境部環境生活課
- 環境省 羽幌自然保護官事務所
- 公益社団法人 北海道獣医師会
- 留萌獣医師会
- 北海DOぶつnet

[執筆責任者]玉本隆司（酪農学園大学／4〜10ページ）
[写真協力]髙田真弓（NPO法人 猫たちを守る十勝Wishの会）

「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会
ホームページ http://teuri-neko.net/
facebook https://www.facebook.com/teuri.neko/

HPはこちら　Facebookはこちら

Cat's health care handbook

北海道獣医師会監修

猫の健康飼育ハンドブック

飼い主さん必見！
猫のかかりやすい病気や飼育方法について
獣医さんが分かりやすく説明します

発行／「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会
平成30年3月発行

Characteristics of a cat

猫ってこんな動物です

知能

猫の知能は、1歳半から2歳ほどの人間の赤ちゃんと同じくらいと考えられています。単独行動を行うため、他の動物よりも場所の記憶力に優れているといわれています。引き出しや冷蔵庫を勝手に開けたりするのは、その場所に食べものがあることを覚えているからなのです。

身体能力

猫はトラやライオンと同じネコ科で瞬発力、ジャンプ力、走力など、狩りに必要な優れた能力を生まれながらに持っています。ジャンプ力は身長の5倍、走る速度は時速48kmといわれていますが、長距離は得意ではありません。獲物にそっと忍び寄るための柔軟性もあり、骨や筋肉がやわらかく、全身はバネのようにしなやか。

習性

猫の語源は「寝子」。1日約14〜18時間を寝て過ごします。元々肉食動物で、狩りをする以外は体力温存のため寝て過ごす習性があるため、高い所や狭い場所を好み、昼間は寝ていることが多く、活発に動くのは主に明け方や夕方。また、飼い主にスリスリする行為は、自分のニオイをつけて安心感を得ているためです。

ヒゲ・耳

ヒゲは猫にとって大事なアンテナ。根元にたくさんの神経が集中し空気の流れを感知できるため、暗がりや狭い場所もヒゲが通るようなら体も通ると判断します。また、猫の聴覚は犬の2倍以上で、耳の奥の三半規管が優れているため、高い所から落ちても無事に着地することができます。

成長と寿命

猫は産まれて1ヶ月で人間の1歳に相当し、1年半で人間の成人くらいに成長、寿命は室内飼いの場合、平均で16歳くらいといわれていますが、最近はペットフードの進化もあり20歳を越える長寿猫もいるようです。一方、過酷な状況で暮らす野良猫の場合はだいたい4〜5歳ほどでその猫生を終えるといわれています。

猫にとって屋外は危険！

飼い猫を外に出している飼い主は、これらの危険にさらしていることを忘れてはいけません。
飼い猫がこれらの危険に遭遇した場合には、命を落としてしまうかもしれません。

迷子になる

- ●大きな音等でパニックになる
- ●病気やケガで動けなくなる
- ●繁殖相手を探し放浪する

感染症のおそれ

- ●猫エイズ（猫免疫不全ウイルス感染症）
- ●猫白血病ウイルス感染症
- ●猫伝染性腹膜炎　など

交通事故

- ●車と衝突する
- ●寒い日に車の隙間やエンジンルームに入り込む　など

ケンカ

- ●縄張りやメスをめぐる争いでケガを負い、それが原因で感染症になる　など

予期せぬ繁殖

- ●不妊去勢手術しない猫が外に出ると、望まない子猫が生まれ、どんどん繁殖する

Let's keep the cat properly

猫の適正飼育について

愛玩動物の適正飼育に大切な3つのキーワード

捨てない　増やさない　見捨てない

2016年度に全国自治体の保健所、動物愛護センター等での猫の引取り頭数は72,624頭、殺処分頭数は45,574頭でした（環境省HPより）。

殺処分される猫の6割は幼猫で、乳飲み子は即日処分されることが多いです。

動物保護団体「NPO法人 猫たちを守る十勝Wishの会」によると、寄せられる相談で多い理由は、「引っ越しするから」「家族が猫アレルギーになった」「粗相をするから」「歳をとったからもういい」「治療費が払えないから」など。猫をいったん飼育したら、最期まで飼い主が責任を持ちましょう。

猫を迎え入れるとき、「捨てない」「増やさない」「見捨てない」を念頭にこの小さな命と向き合っていただきたい・・・それが私たちの願いです。

猫の不妊去勢手術にご理解ください

最近、「多頭飼育崩壊」という言葉を聞いたことはありませんか？これは猫の繁殖能力の高さを認識せず、不妊去勢していない猫を複数飼い続けた結果、爆発的に数が増えて飼育困難になることをいい、最近社会的な問題となっています。行政や保健所、猫の保護団体への相談数も多く、最終的に殺処分されてしまう猫も少なくありません。

猫は生後6〜9ヶ月で初めての発情期を迎え、妊娠して2ヶ月で出産するため、できるだけ早いうちに不妊去勢手術をすることをおすすめします。

不妊去勢により、性格が穏やかになったり、発情期の鳴き声の抑制、オス猫の場合は壁などへのマーキング（尿スプレー）を防いだり、オス特有の尿の臭いもなくなります。「かわいそうだから」「自然にしたほうがよい」と不妊去勢しないことは、不幸な猫をどんどん増やしてしまう結果につながります。

猫の繁殖の特徴

- **・生まれて半年で妊娠が可能になる**
- **・年に1〜2回程度発情し交尾する**
- **・親子兄弟関係なく交尾をする**
- **・交尾をしたらほぼ100%妊娠する**
- **・妊娠期間は2ヶ月と短い**
- **・1回の出産で4〜6匹を産む**

猫の症状別インデックス

ここでは猫の症状から考えられる、比較的多い病気を挙げてみました。
下記について参考にしていただき、最終的には動物病院で受診するようにしましょう。

猫の病気についてさらに詳しく説明している「一般社団 日本臨床獣医学フォーラム」の「猫の病気」ページもご覧ください。 http://www.jbvp.org/petlovers/cat.html

吐く

- 08異物摂取 ➡ 7Pへ
- 09毛球症 ➡ 7Pへ
- 10消化管寄生虫 ➡ 7Pへ
- 11便　秘 ➡ 7Pへ
- 14腎不全 ➡ 8Pへ
- 17甲状腺機能亢進症 ➡ 9Pへ
- 20リンパ腫 ➡ 10Pへ

下痢

- 10消化管寄生虫 ➡ 7Pへ
- 14腎不全 ➡ 8Pへ
- 17甲状腺機能亢進症 ➡ 9Pへ
- 20リンパ腫 ➡ 10Pへ

おしっこが出ない、少ない

- 12猫下部尿路疾患 ➡ 8Pへ
- 13尿路結石 ➡ 8Pへ
- 14腎不全 ➡ 8Pへ

咳、くしゃみ

- 05ウイルス性上部気道炎 ➡ 6Pへ
- 06猫喘息 ➡ 6Pへ
- 20リンパ腫 ➡ 10Pへ

よだれが多い

- 08異物摂取 ➡ 7Pへ
- 14腎不全 ➡ 8Pへ
- 15口内炎、歯肉炎 ➡ 9Pへ

水をたくさん飲む、おしっこが多い(多飲多尿)

- 14腎不全 ➡ 8Pへ
- 16糖尿病 ➡ 9Pへ
- 17甲状腺機能亢進症 ➡ 9Pへ

呼吸が荒い

- 03猫伝染性腹膜炎(FIP) ➡ 5Pへ
- 06猫喘息 ➡ 6Pへ
- 07心筋症 ➡ 6Pへ
- 17甲状腺機能亢進症 ➡ 9Pへ
- 20リンパ腫 ➡ 10Pへ

元気、食欲がない

- 03猫伝染性腹膜炎(FIP) ➡ 5Pへ
- 18子宮蓄膿症 ➡ 10Pへ
- 20リンパ腫 ➡ 10Pへ

※その他ほとんどの疾患が含まれる

猫のウイルス感染症

猫の外飼いのリスクのひとつが下記のようなウイルス感染症です。
発症しない猫もいますが、ウイルスそのものは消滅しないため、注意が必要です。

CASE 01

猫免疫不全ウイルス感染症（ねこめんえきふぜん）

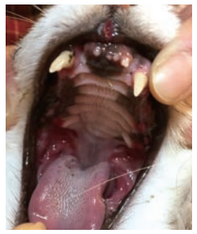
猫同士のケンカでウイルスがうつる場合もあるため、外飼いは感染リスクが高い

いわゆる「猫エイズ」と呼ばれている病気です。猫免疫不全ウイルス(FIV)が感染することにより、様々な症状を引き起こします。感染経路は咬傷によるものが主だと考えられていますが、母子感染もおこるようです。

FIVに感染した直後は急性期と呼ばれ、発熱やリンパ節の腫れなどが認められます。これが数週間～数ヶ月続いたのち、潜伏期に入ります。潜伏期は数年続くとも言われており、そのまま寿命を迎えることもあります。

その後、全身のリンパ節が腫れる時期を経て、発症します。発症すると口内炎や歯肉炎、くしゃみなどが認められ、その後様々な合併症を併発して衰弱していきます。発症してからの進行は早く、1年程度で死に至るとされています。

また、FIVに感染すると、リンパ腫などの腫瘍の発生率が高くなることも知られています。感染しているかどうかは院内キットを用いた血液検査で確認できます。ただし、感染直後は誤った結果となることがあるため、1～2ヶ月後に再検査をする必要があります。現時点で感染後の効果的な治療法はなく、感染させないことが重要になります。一番の感染要因は、すでに感染している猫と喧嘩をして噛まれてしまうことなので、外に出さなければ感染のリスクはありません。また、室内で感染猫と非感染猫が同居している場合でも、食器などを介しての感染はないとされています。



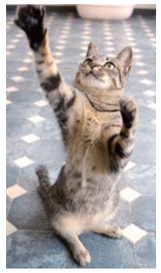
口内炎になり抜歯した猫

屋外は猫にとってリスクが高い

CASE 02

猫白血病ウイルス感染症（ねこはっけつびょう）

猫白血病ウイルス(FeLV)の感染により、様々な腫瘍を引き起こしやすくなることが問題となります。感染経路は感染猫の唾液や血液を介した感染のほか、母子感染も起こりやすいとされています。FIVと比べると感染しやすく、感染猫と非感染猫を同居させる場合は部屋を分けるなどの対処が必要とされています。ウイルス感染そのものというよりは、そのせいで発症リスクの上がる腫瘍が問題となります。特に縦隔型リンパ腫を起こしやすいとされており、それ以外にも様々なタイプのリンパ腫、白血病、血液疾患を発症しやすくなります。



FeLVもFIVと同様に感染後にウイルスを排除することはできず、感染させないことが重要となります。外に出さず、感染猫と接触させないのが一番ですが、FeLV感染を予防するためのワクチンもあります。ワクチンによる予防は100%ではありませんが、どうしても外に出す場合は、事前にワクチン投与をおすすめします。

CASE 03

- 呼吸が荒い
- 元気、食欲がない

猫伝染性腹膜炎(FIP)（ねこでんせんせいふくまくえん）

猫コロナウイルスによって引き起こされる、致死的な感染症です。猫の腸には病気を引き起こさない猫腸コロナウイルスが存在し、これが突然変異を起こすことで猫伝染性腹膜炎ウイルスに変わると考えられています。多頭飼育で発生頻度が高いこと、純血種の猫で感染しやすいことがわかっており、糞便や唾液から感染すると考えられていますが、詳細な感染経路や突然変異を起こす原因は明らかではありません。発熱、元気消失、食欲低下といった症状があり、腹水や胸水が溜まるタイプ(ウェットタイプ)と眼や神経に異常が出たり、肝臓や腎臓に肉芽腫と呼ばれるしこりを作ったりするタイプ(ドライタイプ)が存在します。胸水が溜まると呼吸が苦しくなります。現時点では、治療法・予防法ともに確立されておらず、発症すると数週間～数ヶ月で死に至ります。

CASE 04

猫パルボウイルス感染症

猫汎白血球減少症とも呼ばれます。仔猫が感染すると重症化し、時に致死的です。発熱、元気消失、食欲低下のほか、下痢や嘔吐もしばしば認められます。腸から出血した場合には血便が認められることもあります。また、白血球が著しく減少し、細菌などの感染に非常に弱くなります。感染してしまうと症状を緩和する治療しかできず、死亡率も高いため、予防が重要となります。動物病院で一般的に接種される混合ワクチンで、この感染をほぼ予防できます。

早めのワクチン接種がおすすめ

CASE 05

☑ 咳、くしゃみ

ウイルス性上部気道炎（じょうぶきどうえん）

猫ヘルペスウイルスおよび猫カリシウイルスによる感染症で、いわゆる「猫風邪」と呼ばれている病気です。口や鼻、眼の粘膜から感染し、くしゃみ、鼻汁、目やになどが認められます。猫ヘルペスウイルスでは一般的に眼の症状が強く、結膜炎などがみられます。一方、猫カリシウイルスでは口の中や舌に潰瘍ができるのが特徴です。成猫では症状を出さないか、出しても軽症ですが、仔猫では重症化することがあります。感染後の治療は症状を緩和する治療法しかないため、予防が重要になります。動物病院で一般的に接種される混合ワクチンで、これらの感染をほぼ予防できます。

ウイルス感染症などの予防方法

感染している猫を外に出すことは他の猫にウイルスを移す機会を増やし、地域の猫全体にこのウイルス感染が蔓延する結果となりますので、猫を室外に出すのは止めましょう。
いずれの感染症も猫から人に移ることはありません。※猫エイズは人のエイズとは別の病気です。

飼い猫が感染してしまったら

①特に発情期に外に出たがる猫が多いことから不妊去勢をして、外に出さないようにしましょう。
②他にも飼い猫がいる場合は感染していない猫とは別の部屋（もしくはケージで隔離）で生活させます。食器・トイレなどは専用の物を用意し、世話をする際にはこまめに手を洗いましょう。

呼吸器・循環器の病気

CASE 06

☑ 咳、くしゃみ
☑ 呼吸が荒い

猫喘息（ねこぜんそく）

人と同様に猫にも喘息があります。さまざまなアレルゲン（タバコの煙、花粉、ハウスダストマイトなど）を吸引することで、気管支の炎症や気道の閉塞が引き起こされます。症状としては咳や呼吸困難、喘鳴（喉がゼエゼエ鳴ること）が認められます。猫では飲水や興奮などが引き金となって、逆くしゃみと呼ばれる症状が認められることがあります。くしゃみと咳、逆くしゃみは時に区別するのが困難です。空気清浄機による環境改善やステロイド剤などを用いて治療しますが、慢性化すると治療が難しくなるため、早期の対応が勧められます。

CASE 07

☑ 呼吸が荒い

心筋症（しんきんしょう）

心筋症とは心臓を構成している筋肉が変質し、正常な収縮が行えなく疾患です。肥大型心筋症、拡張型心筋症、拘束型心筋症などが存在します。このうち、猫では肥大型と拘束型が多いとされています。いずれの型でも、心臓がうまく収縮できず、心臓から全身へ血液を送り出す機能に異常をきたし、さまざまな症状が現れます。肺に水がたまったり、胸水が溜まると呼吸困難が認められます。また、血栓ができやすくなり、特に後ろ足につながる血管で血栓が閉塞すると麻痺が認められます。心筋そのものを治療することはできず、心臓の働きを補助するような薬剤を使用します。

消化器の病気

CASE 08

☑ 吐く
☑ よだれが多い

異物摂取（いぶつせっしゅ）

猫は警戒心が強いため、犬よりは異物を飲み込みづらいとされています。しかし、特に若いオス猫では、しばしば異物による胃腸障害が認められます。おもちゃで遊んでいるうちに勢い余って、というケースが多いようです。胃の中に固形の異物があると吐き気が認められ、よだれが増えることがあります。食道や小腸で異物が詰まると、より重篤になります。また、異物の中でも特に注意が必要なのがひもです。猫は一般的にひもが好きで、よく遊びます。このひもを飲み込むと、ひもの一端は口の中や胃の中でひっかかり、もう一端はどんどん先へと送り出されていきます。結果としてひもを中心に腸が手繰られたような形となり、ひどい場合にはひもによって腸が裂けることがあります。腸内には大量の細菌が存在するため、重篤な細菌性腹膜炎を発症し、命に関わります。ひもで遊んでいたあと急に食べなくなり、嘔吐が続くなどの場合は緊急処置が必要です。

CASE 09

☑ 吐く

毛球症（もうきゅうしょう）

猫はきれい好きな動物で、よく毛づくろいをします。また、なにかストレスがあると気持ちを落ち着けるために毛づくろいをすることもあります。毛づくろいをすると、その都度少しずつ毛を飲み込んでしまいます。これがたくさんたまってくると吐き気を催すようになり、空えづきを繰り返したり、猫草を食べたがったりします。吐いた際にフェルト状に固まった毛が出てくることがあり、出てしまえば楽になるようです。毛づくろいそのものは止められないため、こまめにブラッシングし、飲み込む毛の量を減らしてあげることが重要です。

CASE 10

☑ 下痢
☑ 吐く

消化管寄生虫（しょうかかんきせいちゅう）

一般的に認められる寄生虫としては、猫回虫、猫鉤虫、瓜実条虫、コクシジウム症などがあります。いずれも、成猫ではほとんど症状を出しませんが、子猫では嘔吐や下痢が認められることがあります。猫回虫では、嘔吐した際に虫体を吐き出すことがあります。また、瓜実条虫ではゴマ粒大の変節が肛門周囲に付着していることがあります。特に野良猫を保護した場合には、しばしば消化管寄生虫が認められます。そのため、保護直後は症状がなくても一度は糞便検査を受けることが勧められます。

CASE 11

☑ 吐く

便秘

猫はあまり水を飲まないため、便秘しやすいと言われています。そのほか、トイレが汚いなどの理由で排便をしなくなり、便秘が悪化することがあります。便秘すると便が出ないほか、繰り返しいきんだ際に嘔吐が認められることがあります。程度がひどい場合には浣腸が必要になります。

猫トイレはまめなお掃除を心がけたい

（札幌市）NPO法人
ニャン友ねっとわーく北海道
代表　**勝田 珠美**

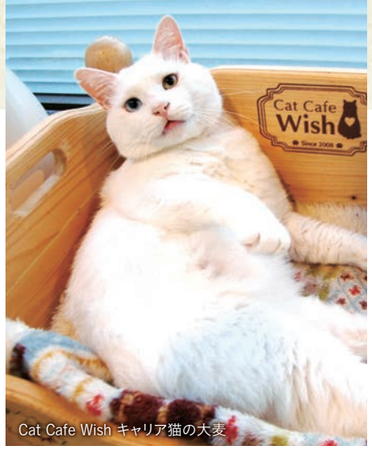
北海道の保護団体からひとこと①

私たちニャン友ねっとわーく北海道は動物の環境と福祉の整備を図るとともに、動物愛護精神の啓発に関する事業を行うことにより、人々が動物の生命の尊厳を守り、人と動物が共生することのできる思いやりのある社会の実現に寄与することを目的とし活動しています。

保護猫のケアにおいてはしっかりとした知識を獣医師の先生から学び、飼い主に繋ぐその日まで愛情をもってのお世話を心がけています。

小樽で保護されたポセイドン(長毛)・ロプロス(短毛)

（帯広市）NPO法人
猫たちを守る十勝Wishの会
代表　**原田 美加**



Cat Cafe Wish キャリア猫の大麦

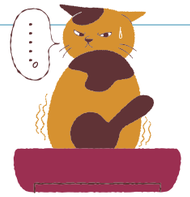
北海道の保護団体からひとこと②

飼い主さんが高齢のため入院や施設に入居、または認知症が進み世話ができないため猫を手離したいと本人ではなく身内や介護施設の方からの相談がとても増えてきています。

猫の寿命は約20年。ご自分がいつまで世話ができるか考え猫を迎えましょう。また、年齢に関わらず独居の方は、自分にもし何かあった場合に猫を託せる人をみつけておくことも大切です。

現在、我が家には当施設を引退した高齢猫や猫エイズを発症した子など8匹が暮らしています。もちろん最後まで責任をもってお世話をし看とります。一匹でも多くの猫が幸せな猫生を送れるよう、皆さまのご協力をお願いします。

泌尿器の病気



CASE 12

☑ おしっこが出ない、少ない

猫下部尿路疾患（ねこかぶにょうろしっかん）

猫下部尿路疾患は、排尿困難や頻尿、不適切な排尿を引き起こすさまざまな疾患の総称です。その中でも、原因不明に突然発症する特発性膀胱炎が猫にはしばしば見られます。原因としては、トイレや猫砂などの環境の変化、ストレスなどが挙げられ、神経質な性格の猫では、家に来客があったり、逆に長時間家を空けているだけで発症することがあります。トイレに何度も出入りする、長時間排尿姿勢をとる、排尿時に唸ったり鳴いたりする、一度の排尿量は少ないなどが特徴で、トイレ外での排尿もよく見られます。また、血尿も一般的です。

CASE 13

☑ おしっこが出ない、少ない

尿路結石（にょうろけっせき）

猫ではストラバイトとシュウ酸カルシウムという２種類の結石が一般的に認められます。特に若いオス猫では、砂状の結石による尿道閉塞がしばしば見られます。尿道が閉塞するとおしっこを出したくても出せず、トイレで唸りながら何度もいきむ様子が観察されます。おしっこが長期間出ないと腎不全になり重篤な状態に陥ります。体質とドライフードが原因とされています。尿路結石を予防する食事（c/d、pHコントロールなど）もありますので、動物病院にご相談ください。

CASE 14

☑ 吐く
☑ 下痢
☑ おしっこが出ない、少ない
☑ よだれが多い
☑ 水をたくさん飲む、おしっこが多い

腎不全（じんふぜん）

腎不全は、尿道閉塞や中毒物質の摂取などにより急激に発症する急性腎不全と、加齢などによって腎臓の機能が少しずつ低下していく慢性腎不全に分けられます。急性腎不全では急激な元気、食欲の低下、嘔吐、下痢などが認められます。尿道閉塞以外でも腎臓で尿が作られなくなることがあり、おしっこが減ります。慢性腎不全は、特に１０歳以上の高齢になった猫で一般的に認められる病気です。１５歳以上の猫では３０％以上が慢性腎不全を患っているとの報告もあります。初期には飲水量の増加、尿量の増加が認められ、薄いおしっこを大量に排泄するようになります。進行すると尿毒症と呼ばれる状態になり、嘔吐やよだれ、食欲低下などが認められます。さらに進行すると腎臓で尿が作られなくなり、おしっこが減ります。人間では人工透析が行われますが、猫では一般的でなく、点滴などによる緩和治療が行われます。慢性腎不全は、早期に発見すれば食事療法などで悪化を遅らせることが可能です。ただし、治癒することはできず、少しずつ進行していきます。

トイレ掃除の時に尿や糞の状態を見て猫の健康チェックをしましょう

口腔・歯科の病気

CASE 15

☑ よだれが多い

口内炎・歯肉炎

猫には人のような虫歯はほとんどありません。代わりに、歯周病が多いと言われています。歯茎が赤く腫れ、時に出血する歯肉炎や、頬の内側の粘膜がただれる口内炎がしばしば認められます。これらはウイルスに関連したものと、歯石や細菌感染によるもの、原因不明のものに分けられます。ウイルスに関連したものとしては猫カリシウイルスによる口腔内の潰瘍があるほか、猫免疫不全ウイルス感染症でも口内炎・歯肉炎がよく認められます。歯石が付着すると、細菌感染が進行し、歯肉に炎症を起こします。炎症を起こした歯肉はどんどん退縮し、歯の根元が見えるようになってきます。ひどくなると歯が抜けたり、歯の根元に膿が溜まったりします。膿は骨を壊して皮膚の下にまで入り込み、顔が腫れることもあります。症状としてはご飯を食べる際に口を痛がり、とくにドライフードを食べたがらない、ときに血液の混じったよだれが多い、などが挙げられます。抗生物質や消炎剤による治療が行われますが、ひどい場合には歯を抜く必要があります。

内分泌の病気

CASE 16

☑ 水をたくさん飲む、おしっこが多い

糖尿病

糖尿病は猫で比較的多い内分泌（ホルモン）の病気で、人の糖尿病と同じように肥満に伴って発症するものと、膵炎の後に発症するものの２つのタイプがあります。糖尿病ではインスリンと呼ばれるホルモンが重要です。インスリンは通常は膵臓で作られ、血液を介して全身に運ばれ、血液中の糖分を体の細胞（とくに脂肪や筋肉の細胞）に取り込む働きをしています。肥満になった猫では脂肪が増えるため、インスリンの働きが間に合わず、糖分を取り込みきれなくなります。また、膵炎を発症した猫は、膵臓がインスリンを十分作れなくなるため、やはり糖分を取り込めなくなります。結果として血糖値が上がり、余分な血液中の糖分が尿の中に漏れてくるため、「糖尿病」と呼ばれます。症状としてはおしっこの量や回数が多くなり、その分たくさん水を飲むようになり、体重がどんどん減っていきます。ごくまれに神経に異常をきたし、ジャンプできなくなったりすることもあります。糖尿病の初期であれば、食事や体重の管理で治療することができ、まれにですが治癒することもあります。進行するとインスリンの注射が必要になってしまいます。

CASE 17

☑ 吐く
☑ 下痢
☑ 水をたくさん飲む、おしっこが多い
☑ 呼吸が荒い

甲状腺機能亢進症（こうじょうせんきのうこうしんしょう）

首の部分、気管の横に甲状腺と呼ばれる器官があり、甲状腺ホルモンが分泌され体の代謝を上げ、活性化する作用を担っています。なんらかの原因でこの甲状腺ホルモンが過剰になることが甲状腺機能亢進症です。人のバセドウ病と少し違いはありますが、病気としては類似しています。原因として、日本では甲状腺の腫瘍が多いと言われており、そのため発症は高齢になってからのことがほとんどです。良性と悪性の腫瘍が混在していますが、腫瘍の転移よりもホルモン過剰が問題となります。症状としては活動性の増加、攻撃性の増加、過食、水をたくさん飲む、食べるのに痩せる、毛がパサパサになる、などがあります。吐き気や下痢が見られることもあります。また、猫は通常犬のように口を開けてあえぐことはほとんどありませんが、甲状腺機能亢進症の猫ではしばしばこの症状があります。一般に高齢猫は寝ている時間が増えますが、妙に活動的で動き回るようになった、おとなしかったのに威嚇したり攻撃してくるようになった、などから気づかれることも多いようです。治療としては薬でホルモンを抑えたり、手術で甲状腺を摘出したりします。

生殖器の病気

CASE 18

☑ 元気、食欲がない

しきゅうちくのうしょう
子宮蓄膿症

子宮蓄膿症は犬では一般的ですが、猫ではあまり多くありません。子宮に細菌が感染し、その結果として大量の膿汁が子宮内に貯留します。発熱や元気・食欲の低下が認められますが、犬よりは症状が出づらいとされています。一般的には8歳以上で認められる病気ですが、まれに若い猫でも発症するとされています。治療としては抗生物質の投与と外科手術が選択されます。

皮膚の病気

CASE 19

ノミ感染

野外に出入りする猫ではしばしばノミが感染します。ノミが数匹着いた程度ではほとんど症状はありませんが、ノミに対するアレルギー反応が起こることがあります。ノミアレルギー性皮膚炎では一般的に腰のあたりに病変があり、赤みやフケ、かさぶたなどが認められます。痒みが強いのも特徴です。ノミ取り用の目の細かい櫛で梳くとノミやノミの糞が検出できます。糞は黒いフケのようなものですが、水で濡らすとと赤黒く溶け出します。子猫にノミが大量に寄生した場合は、貧血を起こすこともあります。野外に出さないことが一番ですが、どうしても出てしまう場合、出てしまった場合には、首元に垂らすタイプの防除剤で駆除・予防することができます。

腫瘍の病気

CASE 20

☑ 吐く
☑ 下痢
☑ 咳、くしゃみ
☑ 呼吸が荒い
☑ 元気、食欲がない

しゅ
リンパ腫

リンパ腫は猫で最も多い悪性腫瘍とされています。リンパ腫は全身様々な部位に発生しますが、最も多いのが胃や小腸、大腸といった消化管とされています。また、胸の中の心臓の前あたりにしこりを作る縦隔型、鼻にしこりを作る鼻腔型などが比較的多く認められます。血管やリンパ管の中に存在するリンパ球と呼ばれる白血球の一種が腫瘍化したもので、白血病に近い病気です。そのため、しこりを作っている場合でもそこだけの問題ではなく、全身に広がっていると考えられます。したがって、治療には主に抗がん剤が用いられます。症状は発生部位によって様々で、消化器型では嘔吐や下痢、体重減少が認められます。縦隔型では胸水が溜まることが多く、呼吸が苦しくなります。鼻腔型ではくしゃみや鼻水、鼻出血が一般的です。リンパ腫は8歳以上で多くなるとされていますが、2〜3歳くらいで発症することもあります。縦隔型は猫白血病ウイルスに関連したものがほとんどで、若い年齢での発生が多いとされています。猫免疫不全ウイルスは猫白血病ウイルスほど直接的ではありませんが、リンパ腫の発生率を高めるとされています。

猫の健康管理プログラム

猫を飼ったら、ずっと健康で長生きして欲しいと願うと思います。猫の健康を保つためには注意しなければならない病気があり、これらは定期検査で早期発見したり予防したりすることで未然に防げるものもあります。
また、ライフステージにより注意すべき病気が変わってきますので、猫の一生を考えた健康管理プログラムが必要です。
ここでは、猫ちゃんができるだけ健康で長生きできるよう生涯健康管理プログラムの一例をご紹介します。

生後2〜3ヶ月　**ワクチン接種（3種混合ワクチンなど）**

↓

3種混合ワクチンが基本ですが、必要であればFeLVのワクチンも加える。
※ワクチン回数を1年1回とするかは動物病院により異なりますので、主治医にご相談ください。

3〜4週後に追加のワクチン接種

↓

飼育環境により猫白血病（FeLV））猫免疫不全ウイルス（FIV）のウイルス検査や一般血液検査（全血血球計算と血液化学検査）を行う。

検便、外部寄生虫検査および駆虫

↓

6ヶ月齢　**不妊手術、去勢手術**

↓

猫心筋症などの心エコー検査

1〜6歳　**泌尿器系の検診**

↓

腎結石や膀胱結石の検査

7歳以上　**総合検診（ドック検診など）を毎年もしくは隔年**

↓

10歳以上　**総合検診に加え、甲状腺ホルモン検査**

猫では伝染性のウイルスが多いため、室内飼いであっても健康維持のためにはワクチン接種が必要です。同居猫がFeLVやFIVに感染していた場合には部屋をわけて飼育するか、これらのワクチン接種を行う場合があります。一見健康な猫にも心筋症などの心疾患が潜んでいる可能性があるので、1歳までに（場合により毎年）心エコー検査を実施するのが良いでしょう。

無症状でも腎臓結石や膀胱結石が見られることが多く、定期的に検診が必要です。積極的予防のためには動物病院で処方されるフードに変更することが推奨されます。

7歳以上では人間の中高年にあたり、病気も増える傾向があるので、人間ドックのような総合検診を1年もしくは隔年に1回受けることをお勧めします。

これらの健康管理プログラムは動物病院により異なりますので、かかりつけの動物病院に相談の上、行ってください。